



禅長寺仏殿 一棟

指定 昭和五十二年十一月一日

所在地 いわき市小名浜林城字大門

所有者 禅長寺

江戸時代(十八世紀)

禅長寺は臨済宗に属し、創建は徳一と伝えられている。また中世には鎌倉の建長寺と本末関係があり、禅長寺住職が建長寺の住職になることもあった。

この仏殿は身舎三間四方と、周囲に一間四方を廻らした一重裳階付きの間取となる。斗拱は象木鼻付出組、中備探束、化粧垂木は二軒半繁垂木である。屋根は寄棟造りで、以前は茅葺きであったが、現在はトタン葺きとなっている。重層部分三間を内陣とし、四周一間通りの裳階部分を外陣とした床は、内外陣とも土間たたきである。建築様式は折衷様であり、全体的に禅宗様仏堂を意識した建物である。

柱は木製礎盤上に立てられた、直径四〇cmの粉付き円柱。二本が重層を通し、約一三mの高さに格組天井を張り、それに雲龍などの絵が描かれている。五間の裳階は角柱を礎石上に建て、四周中央にはそれぞれ棧唐戸や引違戸を付け、他の間には花頭窓や板壁が嵌めこんである。裳階部分には繫梁と低い格天井が張っている。

内部には、正面を飾る華麗な厨子が内陣正面に突出して嵌めこまれている。その上部の唐破風の下には、天正七年(一五七九)に下賜された「海會」の扁額(県指定)があり、厨子の中には応永十七年(一四一〇)の銘をもつ木造観音菩薩半跏像(県指定)が安置されている。

この方仏堂建立の記録は、宝暦七年(一七五七)の墨書銘が遺されている。磐城地方唯一の禅宗様仏殿建築として価値ある建造物である。



飯野八幡宮幣殿拝殿

一棟

指 定 昭和五十七年三月二十六日

所在地 いわき市平字八幡小路

所有者 飯野八幡宮

江戸時代・元禄十六年(二七〇三)

幣殿は本殿と拝殿の中間にある幣帛を手向けるための社殿で、切妻屋根妻入造りである。拝殿は切妻屋根平入造りで、幣殿とT字形に一棟をなし、屋根は柿葺きである。正面中央は小さな千鳥破風、そして向拝部分は一間の向唐破風である。幣殿の両側は神饌所と神職控室となり、拝殿三方の差掛け屋根は、廻縁保護のために付加された。柱は全て面取り角柱で、床は中央通り一間と幣殿は板敷であるが、拝殿両脇は畳敷である。また、芻高欄が矩形廻縁に付設する。

拝殿の特徴は、中央の間の鏡天井一面に龍の薄肉彫、欄間は正面幣殿に二頭の唐獅子と牡丹、両側面には鷹と浪の彫刻があつて黒漆地に極彩色をほどこし、天井には宝永二年(二七〇五)、両側面には元禄十六年(二七〇三)の銘がある。幣殿の格天井には、宝輪などが極彩色で描いている。拝殿の柱間には、正面両側面とも二枚の縦棧の板戸を藪風に上下に重ね、必要に応じて取り外して部屋を開放することができるが、東側面後方の下部はくぐり戸になって閉鎖のとき唯一の出入口になる。現在は正面桁行が引違ガラス障子に改造されている。

大きく目立つ向拝の大唐破風は、上部の頭貫と組物、正面大瓶束と両側面の簾股、吹寄せの輪垂木などは後世の改造と思われるが、四本の柱や正面の頭貫、そして彫刻類は元のままである。即ち柱頭の唐獅子や籠彫の木鼻、頭貫上の龍や軒唐破風幕板の鳳凰の彫刻、唐破風の破風板や兔毛通し、千鳥破風の破風板と懸魚なども当初のものである。唐破風の形態や彫刻の内容に時代の反映がうかがわれる。



専称寺鐘楼堂 一棟

指定 昭和五十九年一月二十四日

所在地 いわき市平山崎字梅福山

所有者 専称寺

江戸時代・安永七年(一七七八)

床面積 一〇・一七㎡

専称寺鐘楼堂は安永七年(一七七八)、三十八世良延上人の代に湯長谷村の木工棟梁、水野藤亮の手により再建されたことが古文書や隅木の墨書に記されている。

この建物は、段違いの地形を巧みに利用し建てられた懸造りの袴腰付き鐘楼で、高さが一三・八m、屋根は入母屋造りで、葺材は建立当時は柿葺きであったが、明治末期に瓦葺きに葺替えられ、現在は建立当時の原型を残しながら銅板葺きに葺替えられた。

斗栱は腰組共、和様三手先組で拳鼻付き、軒は二軒本繁垂木、斗栱には葦股が配されている。破風は千鳥破風で、その中央には鰐懸魚が付けられている。

軸組は直径二九cmの朱塗りの円柱七本が建てられ、その上部を台輪・頭貫・長押でつなぎ、堅固な骨組になっている。窓は四周に格子戸が嵌め込まれ、高欄は高さ五三cmの組高欄となっている。葦股や拳鼻などの細部に一部禅宗様式も取り入れられているが、全体的に和様を主体とした建築様式である。

二階床は板張りで、中央九〇cm角が吹抜けになっている。そこに根太格子が取付けられている。さらに腰組より下部の軸組は、三〇cm角の八本の柱で支えられ、一辺三・七mの正方形の空間を構成している。土台は段地部外側まではね出して、これに斜めの受け梁が架け渡されたり、変形を防ぐために方杖などを用いたりするなど、細部に工夫された技法が施されている。また、この軸組を保護するために、外側に美しい曲線をもつ押縁下見板張りの袴腰が付けられ、優美な外観を呈している。



龍門寺楼門

一棟

(附) 棟札木簡 二枚

指定 昭和六十年三月二十九日

所在地 いわき市平下荒川字諏訪下

所有者 龍門寺

江戸時代・安永四年(二七七五)

延べ床面積 五八・七㎡

(一階三二・三㎡、二階二六・四㎡)

龍門寺は青岑珠鷹によって開山され、戦国大名岩城氏の菩提寺である。江戸時代の初め一時衰退したが、幕府から七〇石の朱印地を賜わり、磐城の曹洞宗の総録所として、多くの同宗の寺院を支配した。

この楼門は、棟札によって安永四年(一七七五)九月に再建されたことが判明している。三間一戸の楼門で入母屋造り、茅葺きで一階部分には壁がなく、高さは一一・二六mである。建築様式は、斗拱などは和様で象掛鼻、妻飾り・高欄などには隨所に禅宗様式が取り入れられているが、全体的に和様を主体とした折衷様式をとっている。一六個の礎石上に一辺三〇cmの四面取りの太い柱が立ち、地貫・胴貫・飛貫・頭貫・虹梁などでつなぎ、主要部材には、樺材を使用している。腰組は出三斗組で、その先端に一個の巻斗を設けている。二階は、一〇本の円柱が建つ外陣と、二本の来迎柱を持つ須弥壇が設けられ、仏像が安置されている。

斗拱と出組は比較的単純で、軒の出が大きく、斗拱間には、中備として藁股や蓑束が配されている。化粧垂木は二軒本繁垂木で、高欄を四周に回し、破風は千鳥破風、妻飾りは大瓶束など禅宗様式がみられる。

平面形は扉筋がなく、他に例をみない珍しい形式で、特に屋根の形状は大胆で優美であり、全体的に均整のとれた建造物である。



密蔵院楼門 一棟

(附) 棟札木簡 一枚

指定 昭和六十三年三月二十五日

所在地 いわき市平沼ノ内字代ノ下

所有者 密蔵院

江戸時代・延享四年(一七四七)

密蔵院楼門は、密蔵院(賢沼寺)の境内にある弁財天の山門である。延享四年(一七四七)、内藤備後守政樹の代に造営が始まり、翌年完成した。大工棟梁の平鎌田の奎七、木挽の甚三郎によって建築されたことが棟札に明記されている。

この楼門は三間一戸楼門の、入母屋造りで、以前は柿葺きであったが、現在は銅板葺きである。腰組斗拱・二階斗拱ともに三手先組で、全体的に形が小さく、特に肘木は和様とも禅宗様とも云い難い地方色豊かな技法が用いられている。斗拱間には龕股と雲・水・鳥・草花などの透し彫りの装飾が施され、木鼻や虹梁なども構造的な意匠的な面が重視され、技法も大胆である。基礎は一六個の基石上に土台を据え、対辺二二cmの八角形の柱を建て、正面両脇には内藤備後守政樹寄進の風神、雷神二神が安置されている。壁は板壁で、二階床上には組高欄が設けられている。また、この楼門の垂木の配置は特徴的で、正面は配付垂木(平行垂木)、その他三面は、放射状に配置された扇垂木になっている。この技法は当地方でも数例しか見られず、特記に値する構造である。建築様式は和様と禅宗様との折衷様式で、背面尾垂木上部に鳥の彫物を置き、その他の彫物装飾も、華美になっている傾向がある。

また棟札には、次のように記載されている。

延享四年八月七日平城受取渡因茲大工中永引戊辰夏中葺地出来彫物等極彩色江戸細工棟梁大工平鎌田町奎七龍澤木挽甚三郎本社四本槻小川御拝貳本下高久村而伐石切信州庄内
時延享五龍在戊辰卯日吉祥日棟上目出度相調畢



長福寺 二棟

指定 平成四年三月二十七日

所在地 いわき市小川町下小川字上ノ台

所有者 長福寺

江戸時代(十七世紀)

床面積二八二・六七㎡

長福寺は真言律宗奈良西大寺の末寺で、小川人道義綱が鎌倉極楽寺から慈雲和尚を招いて開山したと伝える。中世から奥州における真言律宗の中心道場として栄え、岩城家代々の帰依をうけ、江戸期には四〇石の御朱印寺であった。寛政二年(一七九〇)の寺絵図には本堂以下一五棟の建物が描かれ、二万五千坪の広大な寺域と伽藍があった。

本堂は度々の焼失後、正保年間(一六四四～四八)に十二世清胤和尚によって再建されたという。

木造平家建平瓦葺きの入母屋造り(以前は茅葺き寄棟造り)で、本堂形態に結界で、両脇間と前面に入側縁、右側に書院と広縁をつけた。脇間には木造興正菩薩坐像(市指定)が安置されている。内陣三間取中央には来迎柱と須弥壇を備え、出三斗と間斗束で絵様折上げ格天井を支えており、本尊である木造地藏菩薩坐像(国指定)が安置されている。なお、来迎柱には朱塗の唐獅子の木鼻が付けられている。左側廂は位牌堂、物置、興正菩薩堂に分けているが、これは上段の間、次の間と共に後世の改造である。床は拭板敷で三方に畳一列を敷く。右三間通りは畳敷きの大広間、奥に上段の間あり、天井は棹縁天井とする。脇の間は正面に竹の節欄間が付けられ、入側柱から身舎稚児柱方に化粧垂木が立ち登り、象木鼻と海老虹梁で繋ぐ。柱は面取角柱で、木鼻付き頭貫と虹梁が架けられている。全体的に改修が進められてきた建物であるが、いわきに数少ない本堂形態を残している江戸時代の貴重な建物である。



山門

元禄五年(二六九二)
桁行 三・〇四m、梁間 二・五四m
建坪 七・七二㎡

この長福寺山門は、一間二戸四脚門、切妻造りの様式である。指定時は椼瓦葺であったが、平成二十三年の震災の影響で傾き危険な状態となったため、解体修理を行なって基礎を改め、さらに袖壁を復元して構造補強とし、屋根を銅板葺に改めた。

板幕股構造であるが幕股中央に透かし彫り彫刻(裏面は別木の彫刻をはめ込む)が施されている。木鼻は象・猿それぞれ頭部のみの古い形態を示しており、化粧垂木は吹き寄せを配置して変化を付けている。また当初は扉と蹴放しが付いていたと考えられる。さらに方立には元禄五年の墨書があり、住職並びに大工名が記されている。棟梁の惣右衛門は、近隣の社寺の棟札などから地元下小川の人で長福寺本堂を建立し、続いて山門を造作した。柱は櫻・冠木・幕股・木鼻は落葉樹系硬木材、梁は桜・楓類、他に檜・杉とさまざまな樹種が用いられ、度重なる火災後の復旧の難しさがうかがえる。

方立の墨書は次の通りである。

(右側)

當寺十四代住覚清修造之 元禄五壬申歲如月上旬 大工棟

梁惣右衛門 新五兵衛 久次郎 庄次郎 木挽戸右衛門

筆者 □□□□

(左側)

常住覚恵 先情 納所瀧田二郎左衛門 覺清六十七才二立

仁郎

建立年代や当時の住職並びに関わった大工の名が判然としており、江戸時代の数少ない四脚門として重要な建物である。



旧川口家住宅

一棟

指定 平成七年四月二十八日

所在地 いわき市鹿島町下矢田字散野

(いわき市暮らしの伝承郷内)

所有者 いわき市

明治四年(一八七二)

桁行 一六・〇五m、梁間 七・八七m

床面積 一二六・五一㎡

この住宅は、もとは内郷御厩町上宿地内にあつて、江戸期頃から代々醤油製造を生業としていた若松家の本家と伝えられる。明治二年(一八六九)の御厩村の火災で焼失し、明治四年(一八七二)に街道に面して縦長に再建された。その後、昭和十四年頃に建物が約九〇度反転し、桁行が南面とされ、翌昭和十五年頃に川口家の所有となった。平成七年解体に至るまで一、二四年を経過した建物である。

建物は比較的規模が大きく、間取りは土間・勝手・広間・座敷と直屋平入り広間型三間取りの形態で、江戸時代末期の間取りを継承している。土間は間口三間と広く天井はなく、堅固に組まれた梁組が露出し荘重である。広間も間口が三間半と広く、一部に土間がある。なお、土間と広間で三間半の連続した間口を持つのは、大勢の出入りを考慮した間取りと考えられる。奥座敷には、付書院をもつ床の間と押入れがあり、面皮付長押し釘隠化粧金具とめて風格を感じさせる。妻側と上がり縁は戸袋で隔たれている。

昭和十四年の改修はあるものの主体部の変更は少なく、創建時の骨格部材が数多く残された明治時代初期の兼業農家として、当時の生活様式を知る上で貴重な建造物である。



旧猪狩家住宅

一棟

指定 平成八年七月十九日

所在地 いわき市鹿島町下矢田字散野

(いわき市暮らしの伝承郷内)

所有者 いわき市

明治十二年(一八七九)

桁行 一四・五四m、梁間 七・八七m

床面積 一一六・七八㎡

この住宅は、明治十二年(一八七九)猪狩新治郎が三十五歳の時に平北目町の大工棟梁・鈴木新吉によって建築された。もとは好間町川中子地内に建てられていたが、平成八年、いわき市暮らしの伝承郷へ移築復元された。

猪狩家には、平藩御門通札の木札が残されており、平藩に關係していたことがわかる。この建物の構造材の梁等は、お城山から切り出し、櫻材の恵比須・大黒柱は赤井嶽から運んだと伝わる。また、現存している土蔵の屋根には、平城に使われていた屋根瓦が転用されている。

建築の計画には細部にわたって新しい工夫のあとが見られる。まず、広間と中の間が区切られていること、北側板の間から外部に掃き出しが付くこと、広間の勝手側空間が大きく、広間の炉の煙出が折上の堅板透かし天井になっていること、さらに土間からの上り口は南側の兩戸の引き込みにより便利のように斜めに広げているなど、直屋平入り広間型三間取りの変形で、浜通り地方によくみられる開放的な住居である。

本家屋には、創建以来新年を迎えることに梁に結ばれた年神の縄が残されており、民俗学的にも貴重な資料である。また、いわきの詩人猪狩満直の生家として、文学史上からも特筆すべき家屋である。



旧高木家住宅

一棟

指定 平成九年五月十三日

所在地 いわき市鹿島町下矢田字散野

(いわき市暮らしの伝承郷内)

所有者 いわき市

嘉永三年(二八五〇)

桁行 一六・三六m、梁間 七・八七m

床面積 一二八・八九㎡

この住宅は、もとは常磐藤原町田場坂地内にあつて、柱仕口ほどの墨書銘から、嘉永三年(二八五〇)に建てられたことがわかる。

高木家は、湯本から上遠野への街道筋に面した往時の田場坂宿に酒造を営んでいた本家の奈良屋から分家したことが伝えられ、醤油屋を営み、初代高木久米八の名から刃(かねきゅう)と屋号をつけた。

敷地は街道に面する側が狭く南北に長い形態で、東側に醤油製造時代の作業小屋、東南側に土蔵、西南側隅に馬小屋と物置小屋を配し、母屋南側には従業員用と伝えられる下屋が接続していた。

建物は直屋平入りの形態で、地覆土台が外回りを囲み、上框は二尺五寸と高く、梁組は比較的大きく大黒柱に尺五寸成の差鴨居を組むなど、全体的に高さや部材の太さが目立つ。また、北側が街道に面するため妻側の化粧軒や継破風が巧みに作られている。東側欄間部分は吹き抜けとなり、吹放縁の様相が窺えるが雨戸が建て込まれている。

間仕切建具等は、生活の変化に伴い改造が著しいが、内法長押に大釘(釘隠化粧金具兼用)が付き古様が見える。また、面皮長押が座敷に使われ造作により座敷廻りを軽やかにしている。



旧芳賀家住宅 一棟

指定 平成九年五月十三日

所在地 いわき市鹿島町下矢田字散野

(いわき市暮らしの伝承郷内)

所有者 いわき市

江戸時代末期

桁行 一四・八四m、梁間 七・八七m

床面積 一六・九六㎡

この住宅は、もとは田人町旅人字唐沢地内にあって庄屋をとめた農家であった。創建年代は明らかではないが、万延元年（一八六〇）の荷路夫川の氾濫時の水位を患比須柱に刻んでいることから、それ以前の建築であることは確実である。芳賀家の家系図や口伝、または郷土誌などから江戸時代末期頃、十九世紀中葉ごろの建築と推定される。

建物は直屋平入りの形態で、北側に二尺の下屋をおろし、南東面に三尺せがい造りに吹き寄せ化粧小舞付の軒が出る。

土台は無く礎石に柱建てで、土間と広間の間口が三間とほぼ等しい。これは、磐城における基準的な作業スペースの割合である。それから南側縁が五間半間口と広いのは農作業のためであり、また、広間縁仕切りの六尺間引き違い板戸には古様が見える。改修の多い土間回りも、台所や風呂、便所が下屋として、本体の外に増築されていたため主体部の変格は少なかった。創建時の部材が多く残っているが、部分的な腐朽は著しかった。

芳賀家住宅は、棚倉藩時代の重要な道路沿いに位置した建物で、農業を営み庄屋をつとめ、比較的安定した生活基盤を持っており、芳賀家二代目の金之丞は教育の重要性を認識し、当時自宅を開放して寺子屋学校を開き近隣の子弟の教育に当たっていたという。

この住宅は、江戸時代末期の農家の典型的平面形があり、随所に当時の生活がにじみ出ている貴重な建物である。



江尻家住宅

一棟

指定 平成十三年四月二十七日

所在地 いわき市泉町下川字井戸内

所有者 個人

総床面積 三五七・六九㎡

(二階床面積 二〇四・六八㎡)

(一階床面積 一五三・〇〇㎡)

江尻家住宅は、土瓦葺き入母屋造り二階建の書院造りの建物で書院庭を有する。現在は小名浜工業団地の広大な敷地が隣接しているが、創建時は二階から眼下に太平洋が見え、潮風が吹寄せる風景の屋敷であり、昭和三年から昭和五年まで普請造作をした、近代の書院造りの意匠が秀美な建築物である。

建物の特徴としては、屋根は二重化粧出桁、一軒化粧垂木で、一部一文字銅版葺きである。二階屋根は土瓦平葺で避雷針が付く、井桁出化粧組、木口銅版包みの妻破風起り化粧破風に、東南と一部南側に廻高欄に切目縁の廻り縁が付く。一階の玄関は両柱杢礎盤建柱に、化粧入母屋屋根、腰壁保護に簾子下見板が付く。東南の大矩形広縁付き、壁は本漆喰塗壁仕上げ。内部は全体的に檜材を使い、敷居は桜赤身材、大書院・書院天井は神代杉材が用いられ、長押蓋が全個所に納まる。大書院の付け書院には本漆塗り欄間に花狭間組子に箴欄間が、書院四枚組子建具には地袋襖が備えられ、間広の腰障子、硝子戸、兩戸が付く、戸袋内側には桐の一枚廻戸が付く。外廻に総体的に兩戸が付く、硝子戸は、掃出戸透明硝子に窓用に結霜硝子が大半を占める。畳は高麗縁・小紋縁・無地縁のものと、琉球畳が使われている。床の間は本床で床前畳は貫長さ九尺である。付け書院として明かり書院と出文棚の二箇所あり、畳敷きは書院・床の間は、四つ居敷き、他は玄関書院を除いて、廻し敷き畳になる。

総棟梁・志賀金之助、脇棟梁・片寄清弥、石工棟梁・三戸平八。



浄光院銅造宝篋印塔 一基

指定 平成十四年四月三十日

所在地 いわき市小名浜字古湊

所有者 浄光院

江戸時代・享保四年(一七一九)

高さ三・〇三m

四面台座巾〇・九五m

この宝篋印塔は、小名浜港を眺望する風光明媚な高台に所在する浄光院の境内にある。浄光院は寺名を観音寺といい、嘉吉三年(一四四三)岩城親隆の守護仏十一面観音を安置創建したとの寺伝がある。現本堂の入口右脇に設置した宝篋印塔は、銅鑄造建築物で、宝形屋根に梵字を陽刻し、四方隅棟に宝珠と屋根の中心に露盤と相輪を備える。上段蓮座で葦股中備と平三斗組斗栱に高欄が組まれる。三間を表す円柱に内法と地覆長押を組み、下段の蓮弁上に螺髪が乗る様式は、真言を強く表現したデザインに作られている。

この宝篋印塔は、享保二年(一七一七)当地方に蔓延した疫病により死亡した人々の三回忌供養のため造立され、銅造台座の格狭間には数百名の法名が陰刻されている。

製作者は刻文によると、江戸神田鋳冶師・小幡内匠で享保四年(一七一九)七月吉祥日に建立した。発願主を示す主な銘文は次のとおりである。

享保四年己亥七月吉祥日

奥州磐城岩崎郡小名浜邑

開虎山浄光院現住法印祐栄代

願主金剛仏子本明博賢敬白

その後、文化十二年(一八一五)と平成五年(一九九三)に補修されている。



柳沢観音堂 一棟

指定 平成十五年四月二十五日

所在地 いわき市小名浜野田字峰岸

所有者 禅福寺

江戸時代・享保十三年(一七二二)

建坪 六四・二五㎡

柳沢観音は磐城三十三観音霊場の十五番札所で、明治維新時の修験宗廃止に至るまで、羽黒山寂光寺に属する修験宗羽黒派の寺院であった福聚山柳沢寺の観音堂であった。建物は方三間四面堂廻縁付、宝形瓦葺屋根に七・八七尺間の流れ向拜付き向拜部分(後補)、元は茅葺屋根であったが昭和四十八年に瓦葺とした。正面以外は六・三尺間の三間とし、垂木二・二寸×一・七寸本繁垂木となり、一枝三・九三七寸とは多少の誤差であるが、基準が六・三尺間(当時の一間幅)から木割を整えたと考えられる。軸組は七・五寸径の円柱十四本に内法長押と地覆長押及び地貫、そして柱頭は頭貫と台輪で組まれる。二手先出組尾垂木に支輪、中備は藁股と和様出組である。

欄間に両面彫り彫刻、藁股彫刻、獅子・象木鼻および籠彫り木鼻などで荘厳される。内外陣境の欄間の迦陵頻伽(聞いて飽きることない美声)によって法を説くことされ、浄土曼荼羅には人頭・鳥身の姿で表される極楽浄土にいるという想像上の鳥の彫刻は珍しいものである。

天井は格天井で絵様が描かれている。

江戸時代の典型的な方三間四面堂であり、意匠的・技術的に貴重な建造物である。



大國魂神社本殿
棟札七枚
一棟

(附) 棟札七枚

指定 平成十六年四月二十八日

所在地 いわき市菅波字宮前

所有者 大國魂神社

江戸時代・延宝七年(二六七九)

床面積 一六・八六㎡

当社は古代石城国の大國魂神を祀る大國魂神社として延喜式神名帳に磐城郡の神社七社の筆頭にあげられた当地方の重要な神社である。近くには国指定史跡「甲塚古墳」や「根序官衙遺跡群」など古墳時代の遺構が集中し、古代から当地方の中心的存在であったことがわかる。

本殿は、附指定の棟札や墨書などから延宝七年の建立であることが確かめられた。建物形式は桁行三間、梁間二間、入母屋造柿葺型銅板葺平入りの建物である。延宝二年(二六七四)の飯野八幡宮本殿の大改造の直後、磐城平藩の援助のもとで同様な改築工事となったことが確認できる。

また、菅波村の大作で鈴木次兵衛が代々大國魂神社の出入りの大工の家系であることもわかる。

平成二十八年三月に解体修理を終え、幣殿を切り離して当初の姿に近づけた。基礎はコンクリートの耐圧盤を設け、礎石を据付け耐震性向上を図り、各部材の補修組立、そして彩色復元をし、屋根を葺替え単独の本殿として創建に復された。

本市における数少ない神社本殿建築であり、江戸時代の特徴である権現造りの推移していった過程が分かる貴重な建造物である。

附指定棟札

- ① 延宝七年(二六七九)二枚
- ② 元禄七年(二六九四)
- ③ 元禄十四年(二七〇一)
- ④ 慶応元年(二八六五)二枚
- ⑤ 明治二十二年(二八八九)



八劔神社本殿 一棟

指定 平成十七年四月二十七日

所在地 いわき市平下高久字馬場

所有者 八劔神社

江戸時代・寛政十年(二七九)

建坪 一・〇九㎡

八劔神社は平安時代に平下高久字小館に勧請され、祭神は日本武尊を奉祭する。現在地には寛保二年(一七四二)に移転し、その後、寛政十年(二七九)現社殿が建立されたことが扁額(へんがく)の裏面に記されている。そこには、大工矢吹市右衛門(当時六十四歳)の作と読み取れる。また、本殿内部の斗拱面戸板に「享和三年(一八〇三)亥年四月」と墨書が残っており、記録との整合がとれる。

本殿は、軒唐破風向拜入母屋造銅板葺の一間社腰組造の建物で、桁行間口六尺、梁間身舎四・八尺の内陣に六・八尺出の底部分を外陣とする向拜付きで身舎柱を六寸径の丸柱とし、向拜柱は五寸角几帳面子で麻の葉模様の地紋彫を施す。繫虹梁は昇龍と降り龍の丸彫り、胴板彫刻は応神天皇の題材で三カ所に神功皇后の三韓出兵、脇障子に龍門、面戸彫刻、各種木鼻、鬘股、板支輪など豊富な彫刻で飾られている。変わり種として向拜柱に白沢という邪気を払う神獣の木鼻が付く。地覆四隅には獅子と虎が備えられている。腰組は四手先出組斗拱列型に若葉様が付く。

各彫刻には家紋が彫られており、寄進者の存在が伺える。当時、江戸では宮彫彫刻師たちが競い合っており、この彫刻も彼らに発注して運び取り付けたものと考えられる。

主な部材は檜材を使用した彫刻充填式の重要な建物である。



温泉神社本殿

棟札八枚、扁額一面

指定 平成十七年四月二十七日

所在地 いわき市常磐湯本町三箇

所有者 温泉神社

江戸時代・宝暦九年(一七五九)

建坪 一三・四〇㎡

当社は以前、観音山(油台山)の中腹にあったと考えられる。古くは湯の嶽(三箱山)が神体山といわれ、磐城の延喜式内七社の一つ。棟札等により宝暦九年(一七五九)に現在地に移転建立された。本殿は一間社銅板本瓦棒屋根入母屋造流れ向拝付き、桁行間口六・六尺、梁間身舎六尺に六尺出の向拝柱付きで三方に廻縁を付け、高欄とし、身舎正面は奥行き四・五尺と広く取っている。

脇障子に翁と媼、正面に昇龍、降り龍他の彫刻が付く。当時は小名浜代官支配の時で、本殿・拝殿の棟梁は小名中嶋町の立華庄吉、飯塚久左衛門である。宝暦九年の本殿建立から明和三年(一七六六)の拝殿落成まで七年をかけて整備された。その拝殿は大正八年(一九一九)に改築された。彫刻類も大正の頃に一部補修されたと考えられる。

附 指定の扁額「温泉大明神」は享保四年(一七一九)、「徳大寺全昌」の落款があり、「伊州上野生良徳施主」とあり、伊賀国上野生まれの良徳が造らせたものである。

附指定の棟札

- ① 慶安四年(一六五二) 再興、大檀那内藤忠興
- ② 延宝六年(一六七八) 造立、大檀那内藤義概
- ③ 元禄八年(一六九五) 造替、内藤義孝寄進
- ④ 宝暦九年(一七五九)八月吉日 代官渡邊部半十郎
- ⑤ 宝暦九年八月十四日 棟上御祈禱
- ⑥ 宝暦九年七月二十八日 地鎮祭
- ⑦ 明和五年(一七六八) 造立、代官蔭山外記
- ⑧ 安政三年(一八五〇) 内遷宮、代官羽田重左エ門



出羽神社本殿 一棟

(附) 社号額一面、棟札三枚

指定 平成十九年六月二十七日

所在地 いわき市平中神谷字石脇

所有者 出羽神社

江戸時代・嘉永五年(二八五二)

建坪 一・一・五八㎡

出羽神社は、承元元年(二二〇七)羽黒大物忌神社として佐藤信濃守信貫が勧請し、以来八百年以上の歴史を持つ。現社殿は附棟札より嘉永五年(二八五二)建立の一間社・流造、茅葺の建物である。本殿規模は桁行間口七尺、梁間身舎六・三尺の内陣に五・六尺出の外陣となる向拝付きで身舎柱を七寸径の丸柱とし向拝柱は五・四寸の角柱で、組物は一手先出組で中備も出組とした禪宗様のデザインを取り入れ、妻飾りには虹梁大瓶束と簡素な和様建築である。

一枝三寸五分の枝割による建築木割寸法の二軒化粧本繁極で茅葺屋根の大棟に千木三カ所と鳥袞、この形態は大国魂神社や立針鹿島神社と同じで当地方の特徴である。

正面に板唐戸を立て、三方の廻縁を巡らせ刳高欄とし後柱筋は脇障子とする。御扉前に縁板に格子技の御賽銭入が造られている。

現在は、向拝柱に幣殿部が取付き壁板で囲っている。

附指定の社号額「羽黒大権現」は元禄十二年(二六九九)奉納で、江戸で著名な書家であり、磐城平藩内藤家に仕えた佐々木玄龍の書である。弟、文山と共に唐様書道家として有名である。

附指定の棟札

- ① 元禄五年(二六九二) 造替、領主内藤義孝
- ② 正徳六年(二七一六) 造替、領主内藤義嗣
- ③ 嘉永五年(二八五二) 造替、領主牧野備後守



小名浜諏訪神社境内末社 人形六社神社本殿

一棟

(附) 棟札三枚

指定 平成二十二年四月二十三日

所在地 いわき市小名浜諏訪町

所有者 諏訪神社

江戸時代・安永五年(一七七〇)

建坪 一〇・五五㎡

もとは小名浜中島村にあつて人形様として親しまれてきた神社で、今は諏訪神社境内に移転されて覆屋の中に保存されている。一間社流造、鉄板葺、三手先出組、二軒本繁垂木で彫刻が多く見応えのある建物で、中でも腰組で後面の斗栱の独特の組み方は宮大工の技量の高さを感じさせる。しかし、流造は後世の改造で隅木の痕跡から入母屋造が感じられる。本殿左後の柱の墨書から、安永五年(一七七〇)の創建と思われる。

また、腰組斗栱の床下に「水戸大田小澤九郎兵衛殿」も「二内は消されている」と書かれた墨書がある。小澤九郎兵衛は安永年間に水戸藩で鑄銭座を開いた豪商で、大庄屋扱いの身分から水戸藩士として召し抱えられ、最終的には水戸藩の財政に携わる大吟味役にまで昇進した。

本物件は、創建年代がわかること、改修の痕跡から創建当時の屋根形態がわかること、特徴的な腰組架構や龍の彫刻を取り入れていることから、貴重な建造物である。

附 指定の棟札

- ① 明治四年(一八七二) 遷宮
- ② 大正十一年(一九二二) 大破修繕、棟梁馬上兵吉
- ③ 昭和十六年 宮殿移転大改築、棟梁尾形一二



普門寺観音堂

一棟

(附) 扁額 一面

指定 平成二十五年四月二十四日

所在地 いわき市平字北目町

所有者 普門寺

元禄十三年(一七〇〇)
桁行 四・八四m、梁間 五・一二m
建坪 二四・八三㎡

この建物は、いわき市平字北目町の普門寺境内にあり、磐城三十三観音の一番札所である。

三間四面堂、一間流れ向拜付寄棟造り棧瓦葺であったが、平成二十三年の東日本大震災の影響を受けたため、明治期の木端葺の記録をもとに、屋根を木端葺様銅板葺として構造補強を図り、平成二十七年に改修した。

内外陣境の来迎柱の箔押し装飾や虹梁及び斗拱、特に幕股の牡丹の折枝彫刻に優れた技量がうかがえる。その左右の欄間彫刻は、欠損が多いが右に太陽、左に月と古様な彫刻があり彩色は消えているが、創建時の華やかさが偲ばれる造りである。内陣の宮殿も金箔彩色が施され、また小壁板の飛天像は現在後面左右のみであるが、移転または改築等により他の面の飛天は失われたものと考えられる。

堂の正面に掲げられている扁額は、弟文山とともに内藤家に仕えた書家佐々木玄龍の書である。隷書体で書かれた「観音堂」の文字が、櫻材の額に彫られ奉納されたのは、元禄十三年(一七〇〇)十月のことである。

飯野八幡宮古絵図によれば、巡礼観音と記された堂宇が見られるが、当観音堂とのつながりは不詳である。普門寺の開山痴鈍空性は、八幡宮宮司飯野家の祖伊賀光宗の四男といわれ、鎌倉建長寺開山蘭溪道隆の法嗣となり、入唐して研鑽し帰朝後、建長寺八世の住持となり宗門を大いに広めた。その後、岩城の地に移り、長興寺・普門寺・霊山寺・禪福寺の四カ寺を開山し、野田の禪福寺にて正安三年(一三〇二)入寂している。

現在堂内に安置されている仁王像は、かつて飯野八幡宮楼門に置かれたものである。